

第一夜 夢見る頃を過ぎても

仁王が走ってくる。

優に百八十センチを超える長身。むやみに分厚い胸板。四本の丸太で詭えたような腕と腿。短い首の上に載ったでかい頭。ぎよろりと剥いた目。大きな鼻や口。そのいずれをとっても、さながら東大寺南大門金剛力士像がユニクロのスウェットシャツとパンツを履いて突進してくるようであった。

いっそ、そのガタイに相応しい地響きを立てていればその姿は冬枯れの夕暮れに妙にマッチする光景に見えなくもなかった。が、仁王の足音はあくまで静かだった。既に一キロ以上の距離を走り、道は徐々に登り傾斜に差し掛かって行くにも関わらず、鍛えられたマラソンランナーさながら、なお息を乱さず仁王は静かに走り続けた。

多くの港がそうであるように、神戸もまた坂の多い街だ。山が海まで迫り、深く海に喰い込む。大型船を迎え入れるために選ばれた天然の良港とはそういうものなのだろう。

この物語は2007年亥年が明けて間もない一月の夕暮れ。第六突堤の工場群を抜け、そんな神戸の坂道の一つの黒い影が疾走していくところから始まる。

仁王はやがて国道四十三号線を越え、住宅街の急坂きゅうはんを抜けて行く。はるか坂の中腹に母親に手を引かれて上っていく小さな少女の姿があった。異様な気配に振り返った少女は『ひっ』という短い悲鳴を上げて母親にしがみ付いた。しがみ付かれた母親も迫り来る金剛力士を目にしてその場で石になりかたったが、はっと我に返ると、ひしとわが子の肩を抱いて

庇った。仁王は凝固している親子の傍らを脇目もふらず必死の形相で疾駆して行った。

「あかん。間に合わん」

左腕のスポーツウオッチを見遣って、仁王は悲鳴のような呟きを漏らした。

三宮は神戸の繁華街である。とりわけJR、阪急、阪神の駅が隣接する陸橋は一日中人通りが絶えることがない。背広姿のサラリーマン、制服姿のOL、濃紺のセーラー服を纏った女子高生の群れ、ベビーカーを押した母親、並んで歩く老夫婦、様々な人が行き過ぎていく。

折しも帰宅ラッシュの混雑が始まった人々の中にひとときわ目を惹く男がいた。身長百八十センチ前後。ひよろりと痩せた体軀がその長身を一層際立たせている。真っ白な髪を丁寧に撫で付け、大正時代の書生が掛けていそうな丸眼鏡の奥では穏やかな瞳が覗いている。柔らかなく結ばれた口元の端は笑むようなカーブを描いていて、総じて往年の文学青年がそのまま年を経てブリーフケースを抱えて歩いているような印象を抱かせた。

男はそごうの方から来てJRの駅に向かってゆつくりと歩いていく。特に急ぐでもない足取りに彼の温和な性格が映し出されているかのようだ。男が自動改札に差し掛かった時、頭上で発車ベルが鳴り響いた。

突如——男の顔から穏やかな表情が消失し、その目がかっと見開かれた。次の瞬間、男は弾かれたように自動改札機に突進するとぶち壊す勢いで突き抜け、持ち前のコンパスを

活かして長い階段を駆け上がった。流れるような動きでホームに停車中の列車に猛進すると、男は今しも閉まろうとしていた車両のドアに強引に体を捻じ込んだ。銀色のドアは慌てたように口を開ける。男が素早く車内に滑り込むとまた音を立てて閉まった。

「ええ、発車間際の駆け込み乗車は……」

鉄パイプの柱に体を預けて一息ついている男の耳に車内アナウンスは全く届いていない。彼は腕時計を見やつて呟いた。

「よし。一番だ」

JR元町駅。場外馬券売り場ができてからこの界限を歩く男達の姿が微妙に変わった気がする。

南京街や元町商店街を中心とする洒落た店が並ぶ一角から北にたかだか百メートル。この界限は観光とは無縁の神戸の地の顔を覗かせている。

元々、この街は夜の訪れるのが少し早い。高架下の焼き鳥屋では三時に店を開け、四時には品薄になり、六時には閉めてしまうところさえある。夜が早く訪れ、人はゆるりと歩く——そんな元町に忙しなく歩き回る男達がいつしか増えてしまった。

折りしも一人の小男が場外馬券売り場から出て来た。身長160センチあるかないかの背丈。それが猫背のせいで余計小さく見える。やや三白眼の小さな目。小さな鼻。小さな口と全体にこじんまりとしたパーツの顔立ち。耳には肌色のイヤホン。右手に八つ折にし

た競馬新聞。左手に赤鉛筆というお約束のような格好がこれほど決まる男も珍しい。不意にくわつと目が見開かれたのは各馬第四コーナーを回ったところか。男の肩が緊張して硬くなるのが分かった。不意に男のポケットで倅田來未がキューティーハニーを歌い出す。

「ほいな」

男は早抜き拳銃よろしくジャンパーの右ポケットから携帯電話を抜きざま左耳に当てる。

「なんやて？それホンマか？……。よっしゃ、できたつ。……。あいつにはよう確かめたんか？……。いけ、逃げ切ったれ」

レースに白熱しながら会話を続けるという器用な芸当をこなしながら、男の足は休むことなく歩き続けている。

「げ、今何時や？……。あかん。間に合わへんやん。あ、また後でかけるわ」

切った携帯電話を元に戻そうとした時、別のポケットでSMAPが世界に一つだけの花を歌いだした。

「はいはい。……。おう久しぶりやん」

男は電話の相手に何事か捲し立てながら、人混みを擦り抜けて行った。

JR六甲道駅。改札を出て右手に行くとバスのロータリー。その北側には多くの飲食店

を擁するビルがあり震災からの復興ぶりが伺える。しかし、町の様相は震災を境に大きく変わった。昔ながらの小さな居酒屋が散在していた街並みは姿を消し、小綺麗なチェーン店が軒を並べている。しかし、駅を少し離れて住宅街の細い路地に入れば未だに古老のよくな老舗がひっそりと建っていたりする。その店もそういう古株の一つだった。

間口が二間ばかりの小さな佇まいである。軒からぶら下がった小さな提灯が、夕陽を背に黒々としたシルエットを作っていて、店が居酒屋であるらしいことを窺わせた。家々に埋もれるようにしていきなりそこに建っているの、土地っ子でも知らない者が多い。いつ頃からそこにあるのか覚えていない者もない。そういえば、『俺が小学生の頃に越してきた時にはあった』といっただったか、四十絡みのサラリーマンが店の前を通りながら話していた。

木枯らしが吹きぬける暮景（けい）の中、遠くから教会の鐘の音が五時を告げる。小さな提灯はそれを待ち受けていたかのように、ひとつ瞬いて朱い灯を燈した。

『酔鏡』

灯に浮かび上がった文字はそう読めた。鐘の音は風に乗って厳かに鳴り続けている。折しも路地を通りかかった中学生くらい（くらい）の少女が足を止めて提灯の文字に目を凝らしていた。まるで世界一列、朱と黒に染まった一枚の絵のような風景の中で、動くものは何もなく鐘の音だけが鳴り響いていた。

「させるかあ」

不意に路地の東側から聞こえて来た雄叫びに少女は身を竦めた。見ると、髪を振り乱

した長身の男と頭一つ低いパンチパーマの男が、抜きつ抜かれつしながらこちらに迫ってくる。みるみる大きくなるその姿は一方はバツクトウーザフューチャーのドク、他方はグリコ森永事件のキツネ目の男に酷似していた。立ち竦む少女をよそに男達は走りながら『ああつ』と頓狂な声を上げた。彼らの視線を追って振り向いた少女は『ひっ』としゃっくりのような声を立てて完全に凝固した。

夕陽を背に東大寺南大門の金剛力士像が走ってくる。距離こそドクやキツネ目男の倍は離れていたが、その勢いとスピードは彼らの比ではない。

「え？え？ええっ？」

一方からは大接戦を繰り広げるドクとキツネ目男。他方からは夕陽を背にした金剛力士。二つの脅威に挟み撃ちにされた少女は銀縁メガネの奥の小さな目を忙しなく動かし退路を探した。が、狭い路地に脇道など期待すべくもない。三人の男達はあと数メートルのところまで彼女に迫ってきている。

その時、彼女の眼の端に提灯の朱い灯が天啓のように飛び込んできた。少女は縋るように店の格子戸を引き開けると、躊躇うことなく店に飛び込み、派手な音をさせてその戸を閉じた。

「うわっちやあ。なんちゅうこっちや」

店の外で金剛力士のものらしい野太い声が情けなく響いた。少女は怯えるように格子戸から一歩たじろいだ。

「いらっしやこ」

低いがよく通る声に彼女は飛び上がった。振り向くと頭を五分刈りにした六十絡みの主人が目を細めてカウンターに向こうからじっとこちらを見ていた。

客の誰もいない店の中はひんやりとして静かだった。L字型のカウンターに赤い革張りの丸椅子が十脚ばかり。テーブル席はない。思いの外に明るく蛍光灯の光が店の中を照らしている。壁も柱も煤で磨いたように年季を積んで燻されているが、不思議と薄汚れている印象はなかった。分厚い一枚板で拵こしらえたカウンターはきれいに磨かれ、銀色の箸立てと灰皿が整然と並んでいた。

「あ、あの……」

飛び込んだままでは良かったもののこれからどうしたら良いかあぐねている少女に主人は重ねて、

「好きな席に座りいや」

と言った。日焼けした顔が人懐っこそうに笑っている。

まだ座りかねている彼女の背後で格子戸が開き例の三人がどやどやと入ってきた。『ひいつ』と少女は短い悲鳴をあげてまた一歩たじろいだ。

「ほんま、なんちゆうこつちや」

言って金剛力士が真ん中あたりの丸椅子に腰を下ろす。椅子が大きな音を立てて軋んだ。

「一番ビール、この娘に持ってかれてしまった。ん？なんや、あんた何でまだ立ってるのん？」
男は改めてしげしげと娘を見つめる。

白いブラウスの上にごわごわした野暮ったいコート。誰かのお古のようなチェックのスカート。小さな子供の余所行きのような黒い革靴はよく磨かれていたが些かくたびれている。俯きがちの頭の後ろで一昔前に流行ったようなポニーテールが揺れている。

どちらかという丸顔の顔立ちは、そばかすが残るあどけなさやと相俟ってやはり中学生にしか見えなかった。

「おい、おい、おい、未成年に飲ませたらまずいやろ。と、言うことは何か？おっちゃん、最初に座った俺が一番ビールか？」

「なんでやねん」

キツネ目男が言い返しながら隣の席に座る。

「最初に店に入ったんはわしや。せやからビールはわしのもんや。けど大将、バリキの言う通りや、なんぼ流行らん店やから言うて呑み屋に中学生はまずいで」

男は座ったままもぞもぞとジャンパーを脱ぐと雑に丸めて傍にあつたビールケースに放つた。

「お言葉ですが」

髪の毛を乱したドクがそのまた隣に座る。

「店の戸に手をかけたのは私ですよ。ユウやんが押し退けて入ったんじゃないですか。当然ビ

ールは私のものです。だご主人、二人の言う通りだ。そもそも中学生のしかもお嬢さんを呑み屋に入れること自体、私は感心しませんな」

男達の視線が少女に集まった。少女は俯いている。ポニーテールを束ねた細身のリボンが蛍光灯の光を受けて桜色に光っていた。

「ええと……」

沈黙に耐えかねてユウやんと呼ばれた男が口を開きかけた刹那、少女がゆつくりと顔を上げた。きゅつと口を結んで銀縁メガネの奥から真っ直ぐに主人を見つめる。

「私、二十歳です。だからお酒呑めます」

主人は瞬き二つ分くらい彼女を見つめてから、にっと笑った。

「ま、座り」

彼女は頷くとコートを脱いでカウンターの端の席に座った。脱いだコートは丁寧に畳んで膝の上に載せる。『どうせ空いてるし、隣の席に置いといて構へんで』その窮屈そうな格好に主人は笑いながら言った。

馬鹿丁寧なお辞儀を返して、彼女はコートとかばんを隣の席に置いた。

主人は素早く冷蔵ケースから冷えたジョッキを取り出し、ビアサーバーに傾けた。コックを倒すと本日最初のビールの泡がシュツと鋭い音を立ててひと吹きする。主人はその泡をシンクに捨てるのと改めてコックを倒す。ゆつくりと黄金色の液体がジョッキを満たし、仕上げにコックを反対に倒すと白い泡が蓋をしていく。

「ほいお待ちど」

少女は目の前のジョッキをきよとんとした顔で見つめている。

「え？私、まだ何も」

「俺の流儀でな、店の一番客の一杯目は俺の奢りやねん。こいつら三人はそれが目当てで毎度駆け込んで来よるんやけど……」

主人はにっと笑った。

「こいつらに襲われると思ったんちゃう？」

「あ」

小さな声を上げた彼女は傍目にも分かるほど頬を朱くした。

「ごめんなさい……」

律儀にパツと立ち上って頭を下げる彼女に男達の方が慌てた。

「ま、まあええがな」

「そやそや、こつちもあからさまに挙動不審やったしな」

ユウやんとバリキが口々に言う。その横でドクがふと気付いたように言った。

「それはそうと、あなた何か別の用事があったのではないですか？もし我々のせいで足止めを喰わせたのだとしたら申し訳ない」

「そら、センスの言う通りやな」

「いえ……、私、このお店に入ろうかどうしようか迷って立っていたんです」

「へ？なんでまた」

「私、今日誕生日なんです。それでお酒を飲んでみたいなあと思って」

男達は改めて娘をまじまじと見た。化粧気はほとんどなく、小さいが形の良い口元の淡い桜色も地のようだ。口紅では真似のできないその艶やかな色合いが銀縁メガネの奥で動く小さな一重まぶたの野暮ったい印象とちぐはぐな感じがした。

「ま、ビールがぬるうならんうちに飲み」

主人に言われて頷くと、彼女は意を決したように目の前のジョッキを持ちあげた。その小さな唇にガラスの縁をあてがう。ゆっくりとジョッキが傾けられ黄金色の液体は彼女の口から喉に流し込まれていく。白い喉が小さく動くさまが小気味良かった。

一息にジョッキの半分程を飲み乾してふうと息をつくとおおつ」と男達はどよめいた。

「こら、ほんまもんの酒呑みやで」

ユウヤんが感に堪えたように首を振った。

「うわあ、めつちゃおいしい」

不意に天井から降って来たような甲高い声が響いた。声の発信源をきよろきよろ探す男達の視線が再び彼女に集まる。手の甲で口を拭っていた彼女もその視線に気づいた。

「えっ？なんですかのん？」

「いや……、なんで急に関西弁？」

「あ、あたし地の喋りはこんなんですう」

あまりのギャップにのけぞる男達の前にいつの間にも魔法のようにジョッキが並んだ。

「ま、まあ、なんにしてもめでたい。遅ればせながら乾杯といこやないか。ええと……」

バリキと呼ばれた大男が彼女を見遣った。

「え？あたしですか？しのぶと言います」

娘は下の名前で答えた。

「ほな、しのぶちゃんの二十歳の誕生日に乾杯」

バリキの音頭でジョッキが賑々しく鳴り、しのぶもジョッキを掲げてお辞儀をした。

「時々前を通るんですけど、変わった名前のお店やなあつて気になってたんです。それで二十歳になったら行ってみよう思うて……。あの名前は音読みで良いんですか？」

急に饒舌になったしのぶが尋ねる。

「そや、すいきようと読むねん。酒呑むとその人の地が出るやろ。飲み方ひとつとっても人柄いうもんがよく出る。で、酔いは人の鏡いう意味でつけたんや」

「あれ？前は一流企業を脱サラしよった酔狂な男が始めた店やから聞いたで」

ユウヤんが口をぬぐいながら言う。

「そうともいう」

しれっと主人は返した。

「ええかげんやな」

「あるいは、高校の時に初恋の人に振られて、一途な想いで独身を通した酔狂な美少年が

やってる店という説もある」

バリキが飲みかけたビールをぶっと吹いた。

「六十のおっちゃんに美少年で、言われたかてなあ」

唐突に店の中に巨人の星の主題歌が鳴り響いた。素早く反応してバリキがポケットから携帯を取り出した。

「おう……、毎度どうも。……。今度の土曜か？ちよつと待って」

器用に片手で手帳を出すと頁をめくる。

「よっしや空いてるで。何時や？……。伊丹のグラウンドな。けど、助っ人のギャラは高いで。……。あかんあかん。基本一万。……。戦術立案込みやて。あとは出塁数の歩合制や。二千でどない？……。かなわんなあ。ほな中取って千五百。……。任しとき。俺が入ったら勝ったも同然や。ほなよろしゅう」

携帯をしまっバリキの横でユウやんがその肩をつついた。

「バリキ、大っぴらにする話かいな。スポーツ賭博は違法やで」

「どこが賭博やねん。社会人野球の助っ人の正当な報酬やて」

きよんとしているしのぶにバリキが説明した。

「週末はたいがいどつかの社会人チームの助っ人をバイトでやっとるねん」

『凄いですねえ』としのぶが感心したような声を上げる。

「しかし、相変わらずそのごつい体とミスマッチなセコい値段交渉しよるな」

ユウヤんが呆れ顔で言うが、バリキはどこ吹く風で携帯をしまった。

「ほい。今日の付け出しや」

主人が三人としのぶの前に小皿を置いた。黒地の皿の上には正方形に切られた平たい料理が四切ればかり載っている。

「なんでしようね。これは」

センセと呼ばれたひよろりと背の高い男が不思議そうに箸でつついている。上半分は挽肉をベースにした焼き物で土台はトーストのようだ。ぷんと生姜の匂いがした。

「変わってるやろそれ。トーストの上に葱や生姜と合わせた挽肉を塗って白胡麻を振って焼いてるねん。中華風お節のオードブルやな。酒のアテやから味付けはちよつと濃いめにしてある」

しのぶはキツネ色に焼けた中華風お節を一枚箸で取って口に運んだ。醤油をベースにした生姜と葱の風味が口に広がる。微かにごま油の香りがした。

「うわ、めちやめちやおいしい」

嬉しげな声に主人は満足そうに目を細めた。男達もつられて箸を取る。見ただ目以上にポリユームのある肴は常連達にも好評だった。

「あ」

二つ目を口に持って行きかけて、しのぶが声を上げた。男達の注目が再び集まる。

「あの……。あたし、そないにお金持ってないんです。お酒一杯だけ頂いて帰るつもりやったか

らお財布に千円入ってるきりで……」

消え入りそうな声で言う。

「そないに心配せんでも大丈夫やて。この店の料理は、どれも二、三百円かそこらの安もんばっかしや」

ユウやんがしたり顔で言う。

「安もんで悪かったな」

「助かってるて褒めてるんやん。そや大将、わしの奢りでしのぶちゃんに生一杯出したげて」

「ええ、そんな」

「かまへん、かまへん。ユウやんの場合どうぜ競馬で稼いだあぶく銭や。ありがとう言うてもろとき」

バリキが横から茶々を入れる。「やかまし」と、ユウやんが肘でバリキを小突いた。

「ユウやんさんは……」

「うわっ、どないしよ。綽名にさん付けされたんなんか初めてや。ユウやんでええて」

「じゃ、ユウやんは名前にユウが付かはるんですか？勇次とか雄一とか」

「ちやうちやう。わしの本名は高橋洋三郎いうえらいカチツとした名前やねん」

しのぶが怪訝そうな顔になる。

「1991年の有馬記念のことや。惚れ込んだ関西馬がおってな。十四番人気やったけど勝つのはこいつやと信じてな。みんながメジロマックイーンを頭に流す中、単勝の一点買いで四

万突っ込んでん」

他の男達の目は無言でそれは無謀だと言っている。

「予想通り先頭を走るマックにみんなが安心しかけたときや。内ラチ沿いに黄色い帽子がぶっ飛んできよった。そのままマックに並ぶ間も与えずぶっちぎりでゴール。あれだけのハイラツプ踏んどきながら上がり3ハロンで三十六秒一のレコードやなんて奇跡みたいな数字出しよつてん」

ユウやんは話に気を持たせるように言葉を切ってジョッキをぐいつと煽った。

「単勝で一万三千七百九十円の万馬券。五百五十一万六千円の配当や。で、それから皆がわしのことを競馬の神さんて崇めるようになって、馬の名前にちなんでユウやんて呼ばれてるねん」

ユウやんの長々しい説明を呆気にとられて聴いていたしのぶは「凄いですねえ」と感想を述べた。が、話の内容を理解できているとはお世辞にも言い難い顔付きだ。ジョッキを空にした彼女の前に新しいジョッキが出された。しのぶは「あ」と声を立ててユウやんを見遣る。ユウやんは照れ隠さそうに手をヒラヒラと振った。

「ごちそうになります」

と言って軽く頭を下げ、しのぶはジョッキを傾けた。

「けど。ユウやんが万馬券を当てたんはあれ一回きりやん。せやのにいつまでたっても二頭目のダイユウサク期待して穴ばっかり狙うから、仲間内でも呆れられてユウやんて呼ばれるよ

うになっただけで聞いたで」

バリキの茶々をユウやんは聞き流す。いきなりユウやんの隣のセンセが立ち上がった。

「二人が自己紹介したとなれば、遅ればせながら私も自己紹介せねばなりませんまい」
芝居がかった口調でそう言うと、何を思ったのか後ろ手を組んで歩き始める。

「私は大学で物理学の教授をやっています。それで、皆からはセンセと呼ばれています」
「まんまやな」

主人が口をはさむ。

「あのう……、なんで歩きながらしゃべらはるんです？」

しのぶが不思議そうな顔を見ると、

「あ、お気になさらず。説明するときの癖です」

センセはカウンターの端までくると、がばつと回れ右をしてまた歩き出す。

「気になさらず、言われたって後ろ歩かれるこっちは気になるわいな」

ユウやんの物言いをもともせぜ——というよりまるで聞いておらず。センセは続けた。

「ただ、大学では別の通り名があります。学内で起きる失せ物、いざこざ、謎、事件をその卓越した推理でたちどころに解決する名物教授。人呼んで」

センセはビシツと右腕を伸ばし、人指し指でしのぶと主人の中間辺りを指した。やはり、クリストファーロイドの生霊が降りてきている。

「理学棟のホームズ！」

「はいはい」

バリキが手のひらをひらひら振って応える。

「しのぶちゃん、こんなんではびっくりしとつたらあかんで、この前なんか……」

「アカンでバリキ、言うたらまたやるやん」

と、ユウやんが止めに掛かったがセンセは我が意を得たりと、壁のコートを羽織ると襟を立てて首のところで裾をつまんだ。

「フフフフ。シヨツカーを裏切ったお前たち。裏切り者は裏切り者で始末する」

いきなり掠れた声でしゃべりだす。

「あの、ええと、これはなんなんですか？」

「私の名を知らんのかね。その情報不足を後悔する日が来るだろう。私の名はシヨツカーにその人ありと謳われた死神博士だ」

「しのぶちゃんが知るはずないやん」

「いや、死神博士は知ってますけど」

「知ってるんかいっ」

「常識ちやいます？ゾル大佐の後任で日本に異動になった人。その正体はイカデビル。やってはったのは天本英世で……って、そうやなくてこれはなんなんですか？」

「だから自己紹介」

まだ、センセは死神博士のままだ。

「どこが自己紹介やねん。ま、センセややこしいから座りいや」

センセは素直にコートを脱ぐと席に戻った。

「と、酒が入ると変身するお茶目などところはありますが、大学教授であることは歴然たる事実です」

事実であることの方がなんだか怖い。

ひと通り自己紹介を終えた形の三人は、申し合わせたようにしのぶの方を見た。

「えつ、あたしですか？ いえいえいえ、あたしは人さまにお聞かせするようなプロフィールは何も持ってません」

ふためいて、しのぶは顔の前でさかんに手を振る。

「ま、呑み屋で人の素性を聞くなんてのは野暮いうもんやで」

主人が助け船を出した。

「もつともや。なんや話ひっぱってしもて何も注文してなかったやん。めっちゃ腹減ってるねん。そや、おっちゃん俺からもしのぶちゃんに誕生祝いや。何か一品出したって」

「いえ、そんなことしてもらったら申し訳ないです」

しのぶは慌てたがバリキは「かまへん、かまへん」というばかりで取り合わなかった。

「ええと、空きっ腹に呑むと良うないから何か腹にたまるもんがええんとちやうかな。今日のメニューはなんやろ」

言ってバリキが主人の背後を覗き込む。つられてしのぶもそちらを見遣った。壁にはホワイ

トボードがぶら下げてあつてこう書かれていた。

お品書き

謹賀新年 亥年

「相変わらず愛想のない品書きやなあ。知らん人が見たら訳わからんで」「というか、私達が見てもわかりませんよ」

主人はしのぶの方を向いて解説した。

「うちの店はレギュラーメニューがほとんどなくてな、出す料理は俺のフイリングと仕入れの中身で毎日変わっていくというシステムやねん。プレゼントの箱開けるみたいに楽しんでもらおうてな、ここには敢えてテーマしか書かんことにしてるいうわけや」

「どない考えても手抜きとしか思えんけどな。ま、適当に揚げ物が欲しいとか、何かさっぱりしたもんとかいうたらテーマにちなんだ料理を拵こしらえてくれるいう仕組みや。メニューは大雑把やけど出てくる料理は間違いないから安心し。で、謹賀新年亥年って何？」

「お正月らしい料理と干支にちなんで豚肉の料理いろいろやな。なんぞボリュームのある料理か……。角煮の出来が良えねん。それ出そか」

「あ、俺も同じやつな」

バリキの注文に主人は「はいよ」と背中で返事をした。いかにもお節料理らしいものをとい

うセンス、何ぞ揚げ物がええなというユウやんの注文に小気味良く応えて主人は包丁を握った。ようやく店が動き出した塩梅だ。

「そういえば今日えらいシヨックなことがあつてん」

ユウやんが中華トーストの最後の一枚を名残惜し気に口に入れながら言った。

「電車でな、前に座った小学生がチラチラわしの方見よるねん」

「なんや小学生にガン飛ばされたんかいな」

バリキの方は付け出しはとうになくなっていて、空にしたジョッキを振って三杯目を注文した。

「まだその方がマシやで。その小学生思い切ったみたい立ち上がったな、わしのジャンパーの裾引っ張って、『どうぞ』って席譲ってくれてん」

バリキはカウンターを叩いて笑った。

「ま、その子から見たら充分年寄りに見えたちゆうこつちや」

「あのなあ、わしまだ四十一やで」

「ええつ、四十一なんですか？」

急にカウンターの向こうからのぶが頓狂な声を上げる。

「つて、いくつに見えとったんや？」

「いえいえいえ、ご苦労されたんやろなって……」

「フオローになってへんし」

「大丈夫ですって、ご自分で気になさってるほど老けて見えませんか」

墓穴を掘りまくるしのぶ自身、ポニーテールに銀縁メガネと相まって、やはり中学生がジヨツキを傾けているようにしか見えぬ。

「ほい、まずセンセから」

主人は漆塗りの平板を出した。

「お正月やかな、せめて器は奮発させてもらたで。輪島や」

黒光りする平板には、手前に数の子、ごまめ、黒豆の三種の神器が綺麗に盛り付けられていて、奥には鱒の照り焼きにはじかみ生姜の紅が色を添えている。皿の端に飾られた葉付きの金柑がお正月らしい演出になっている。

「良いですねえ。オーソドックスですが日本のお正月って感じがします」

「いろいろな種類の料理をちよつとずついうところがお節っぽいやろ」

「日本人らしからぬリクエストですけどワインは何かありませんか」

「ボトルしかあらへんけど、呑みきつてくれるんやったら出すで」

センセが『もちろん』と答えたので主人は冷蔵庫からグリーンボトルを取り出した。普通のワインボトルと違って花瓶のように胴が張っている。主人はセンセの前に透明なワイングラスを置くと、綺麗な手さばきでコルクを抜いて薄桃色のワインをなみなみと注いだ。

「ポルトガルのマテウスや。おめでたい日はこれ決めてるねん」

センセは静かにグラスに口をつけると一口飲んだ。ロゼワインのさっぱりした呑み口に微か

な発泡がお気に召したようで、さっそく料理に取り掛かる。

「ほいお待たせ。二色の竜眼揚げや」

ユウやんの目の前に黒い平皿が置かれた。大葉を敷きつめた上に細長い揚げ物が輪切りになって二本並んでいる。

「お、こっちの竜眼は目が赤いな」

輪切りにされた一切れを箸で摘んでユウやんが言った。

「お節の竜眼揚げはささみを開いて焼き海苔に鶉卵を巻いて揚げるやろ。で、輪切りにして金色に光る竜の目に見立てるわけや。そっちは大葉に明太子を巻いてみた。お正月やし紅白でめでたいなという趣向や。お重に詰めて冷めてるやつより揚げたての方が揚げ物は美味しい。ま、呑み屋の特権やな」

バリキとしのぶの前には湯気を立てている角煮が並べられる。煮つけた大根と半分^{もん}に切った玉子が如何にも旨そうだ。

「うわ、めっちゃおいしそう。バリキさんすみません。いただきます」

しのぶは丁寧にお辞儀をして箸を取った。

「どういたしました。俺もいただきます」

言ってバリキは豪快に箸で肉を切って口に運んだ。

「柔らかい肉やな。めっちゃええもん使こてるんちゃう？おっちゃん、いつも気になってるねんけどホンマにあの値段で元取れるんかいな。なんや凄^{まじ}い贅^{ぜい}沢^{たく}させてもろてる気がするねんけ

ど」

「そこは工夫やて。仕入れも産直や養鶏業者から卸してもらて原価抑えてるし、その角煮にしても普通の肉で煮込み時間をたっぷりかけたらそれくらい柔らかくなるんやで」

客達はしばし黙々と料理を胃に収める作業に集中した。

「そや、この前めでたいことがあつてん」

バリキが人心地ついた顔で言った。

「俺の勤めてる工場の近くにある定食屋の大将がな、十歳年下の常連さんと結婚しはって、その店でお祝い会やってん。その大将の年がなんと五十六。初婚やねんで」

「良え話やん」

ユウやんが焼酎の湯割りから顔を上げる。

「五十を過ぎても恋する気持ち忘れてへんかったいうわけや。わし思うけど、そういう気持ちに年は関係ないで。いくつになってもやな、夢見るころの想いを抱き続けるというのはええことや」

ユウやんが意外にロマンチックなことを言った。

「むしろ恋もスポーツも音楽も興味ないで顔してる若者見ると何の夢も持ったことないんちやうかと思つて不安になるわ」

「それは大きなお世話でしょう。何もスポーツや音楽だけが青春じゃないと思いますよ」
心なしか、冷やかにセンセが言った。

「けど若者がみんなそうやないで、センセンとこのお嬢さんなんか夢まっしぐらいう感じやん」
バリキが取りなす。

「女子大生のお姉ちゃんはバンドやってはるんやろ。それもプロのバックバンドいうんやから大したもんや。下の子は、ダンススクール通って、えらい筋が良えて言うてはったやん。ちゃんと夢を追いかけてる若者もいてるわけで……」

冷やかなまなざしでセンセに見返されてバリキの言葉は尻すぼみになった。センセの額には深い皺が刻まれていた。

「それがいけないんです」

センセは勢い良くグラスを煽った。

「あの二人は夢と現実を混同している。上の娘は今度オーディションを受けてソロバンドを目指すと言いおった。それに煽られたのか、下の娘まで高校を卒業したらジャズダンスのインストラクターになりたいと言い出す始末です」

「夢があつてええやんか」

「そんなものは夢でもなんでもありません。もっと地道に学業を修め、堅い仕事について、幸せな結婚をして……」

「いつの時代の話や」

「時代は関係ありませんよ。あの二人がやっているのは、夢を追い駆けるという方便を使った現実逃避です」

センセはグラスにワインを並々と注いで、それをまた一気に煽った。

「あろうことか暮れにそのことで説教したら上の娘は出て行ったきり正月にも戻りません。下の娘は口もきいてくれなくなりました」

センセは丸椅子の上でそのままうなだれる。背中が『真っ白に燃え尽きちまったぜ』と語っているような気がした。

「ちよつ、ちよつと、あしたのジョーにならんといてや。もしかして家で誰も口きいてくれんようになったから呑みに来たんかいな」

センセの肩はぴくりと震えて、次の瞬間がつくりと落ちた。

「うわっ、ちよつと待ってえなあ。振った話題がまずかったか。なあ、バリキなんかフォローしたって」

「言うてもなあ……。センセの気持ちもわからんでもないけど、せつかく呑み屋に来たんや。いつとき、その話は忘れてなんぞ別の話題にしような。……。そや、センセ年末に会ったとき、帰り際にけつたいな話してへんかったか？大学の同窓会で聞いてきた本屋のミステリーがどうとか、年明けに話してくれるって言うてたやん」

バリキの言葉にセンセはがばつと顔を上げた。丸眼鏡をずり上げ、ついでに髪を少しなでつける。どうも誰かに構ってほしかっただけらしい。あしたのジョーモードから脱出するきっかけを窺っていた節がある。

「そういえば、そんな約束をしていましたね。いや、ミステリーというほど大した話ではないん

ですよ。別に本屋で密室殺人が起きたといった話ではないし……」

「いやいや誰もそんな期待しとらんて。酒の肴になったら十分や」
バリキに促されて、センセは話しだした。

「去年、大学時代の同窓会がありましたね。当時、同じゼミにいた女性から聞いた話です。我々が学生だった頃の事ですからもう二十年以上前の話ですね」

センセはワインで喉を湿して話を続けた。

「彼女のご実家は東京なんですがね、夏休みに実家に戻った彼女は池袋の書店でアルバイトをしていたらしいのです」

話は大学院生だった二十数年前のことだとセンセは説明した。

最初にその男がやってきたのは7月の末の土曜の夕方だったそう。週末だったので、前年の短大を卒業した友人と待ち合わせをしていて、早く退けたくてうずうすしていたからよく覚えてるらしい。

そろそろ交代になる五時少し前、四十半ばといった年恰好の男が自動ドアを通って店に入ってきた。着古したポロシャツに年季の入ったストラックス。全体にくたびれた外観の男は真っすぐに彼女のいるレジにやってくると、にゅっと手を突き出した。握り締めていた拳を開くと大量の五十円玉がカウンターにじゃらじゃらと広げられる。

『千円札に両替してくれ』

ぶっきらぼうにそう言うと、彼女が枚数を数えている間、神経質そうにカウンタを指で

叩いていたという。

五十円玉が丁度二十枚あることを確認して千円札を渡すと、男は引っ手繰るよう
して受け取り、自動ドアに肩をぶつけながら男は店を飛び出して行った。

「一度きりでしたら忘れてしまうような話なのでしょうが、それから男は毎週土曜の夕方
になるとやって来たのだそうです。アルバイト仲間に尋ねてもそれ以外の曜日に現れること
はないようで、『土曜日のおじさん』なんてニックネームまでつけられていたそうです」

「確かにけつたいな話やな。何でそのおっさんは、そないぎょうさんの五十円玉を持っとつたん
やろ。それにわざわざ本屋まできて両替していく言うのもようわからん」

バリキが角煮の最後の一切れを口に持っていきながら言った。

「たとえば、五十円玉の流通調査とかちやうか？」

ユウやんが赤い目の竜眼揚げを頬張りながら言う。

「この明太子バージョンめっちゃ旨いわ。今年のナンバーワンヒットちやうか」

「今年始まったばかりやで」

「バレたか……、何の話やったつけ。あ、そや、五十円玉の話や。そのおっちゃん多分財務省
の調査員やねん。あ、その頃やったら大蔵省か。で、五十円玉に特殊な塗料が塗ってあつ
てな、本屋からどこに出回るかを調べてはったんや」

「あのなあ、そないなもん調べてどないするねん。だいたいやな、伝書鳩や鮭の放流やないねん
から、特殊な塗料が付いとつたって追っかけようがないやん」

「じゃあ、発信機か？」

「金がかかってしゃあないわ。第一、本屋で二十枚ずつちまちま流出させるくらいやったら、造幣局から大量に放流した方が効率的やろ」

「それもそうやな。ほな、マネーロンダリングちゃうか？銀行強盗やった金がナンバーから足がつかんように洗濯するいうやつちゃ」

「ゼロが六つか七つ少ないでしょう。第一、五十円玉にナンバーはありません」

センセは鰯の照り焼きの最後の一切れを頬張りながら生真面目に答えた。

「俺の考えでは暗号やな」

ビールを煽ってバリキが言った。

「土曜日のおじさんと店長は結託して店の金の横領とか何か悪いことをしてたんや。ただ、表立って会話をしているとところを見られたら共犯関係がバレてしまう。せやから、五十円玉に特殊な塗料で文字を書いて、連絡取り合ってたというわけや」

「あ、特殊な塗料ネタをパクりよったな」

「本質がちやうわいな。連絡は毎週土曜の夕方に来ると決められとった。店を閉めてからレジの集計をする時に店長は五十円玉を確認すればええわけや。レジの五十円玉を全部広げてやな、部屋を暗くして特殊な懐中電灯を当てると、ボウっと文字が浮かび上がる仕掛けや。二十文字あったら相当な情報が伝えられると思うで。どや？」

それを聞いていたしのぶは箸を止めた。

「でも、バリキさんの考えではセンセのお友達はその犯罪に噛んどらへんのですよね」

「そらそうやる。いくら時効や言うても噛んどったらそんな話せえへんやる」

「だったらおかしいんちやいます？その人、何も知らへんからその五十円玉をレジスターに入れてしまいますよ。土曜日のおじさんが帰ってからもお客さんはまだまだ来ますやん。センセのお友達なり、他のレジの人がお釣りにその五十円玉を使うてしもたら、店長がレジの集計する頃には暗号は読めんようになってるんちやいますやるか」

「あ」

「あ、やないで」

ユウやんが大仰なため息をついた。竜眼揚げを片づけたユウやんは皿を返しながら暫し次のオーダーを思索している様子だ。

「なんぞ甘いもんがええなあ……。そや、正月らしく、栗きんとんとかないか？」

「げっ、呑み屋でそないなもん注文するか。しかも焼酎やで」

「何言うてるねん。甘いは旨いや。落語のネタでも酒のアテにきんとん頼む話があるやん」

「あれはクスグリでしょう。客を笑わせるためのウケ狙いじゃないですか」

「ほいよ」

信じ難いことだが、黒地の小鉢に艶やかな山吹き色のきんとんが、こんもりと盛り付けられてユウやんの前に置かれた。

「客のニーズに応えるのが、店主の務めやからな」

「うわ、大将愛してるわ」

嬉々としてユウやんはきんとの山に箸を突っ込み両隣の男達を唾然とさせながら旨そうに頬張った。その勢いのまま、焼酎の湯割りをぐびぐびと喉に流し込む。

「なんやこつちが胸焼けしそやなあ」

「あの、五十円玉の話なんですけど」

「はい、しのぶさん」

何かワインに合う料理をと、オーダーしていたセンセは教壇から生徒を指名するみたいにしのぶに話を振った。

「土曜日のおじさんはお料理屋さんとか、旅館のご主人やったんちやいます？」

「なんでまた？」

「ほら旅館とかの入り口に穴の空いた硬貨を紐で縛って拵えた亀とか飾ってますやん」

「よう知つとるな。しのぶちゃん、ホンマに二十歳か？」

ユウやんのツツコミにしのぶは得意そうにポニーテールを揺らしながら続けた。

「普通、五円玉で作る人が多いですけど、おじさんは張り込んで五十円玉で作ってたんです。ところが誰かに『置物やったら鶴の方がええで』と言われておじさんもそうしようかと考えた。で、五十円玉をバラして千円札に両替して鶴を折るかなあって……」

「別に亀をバラしてまでお札で作らんでもええやん。タバコの包装紙とかで作ってるの見たことあるで」

「えーっ。でも、『鶴は千円』って……」

センスが両手を組んで指を鳴らした。

「言いたいことはそれだけか」

今度はケンシロウが憑依したらしい。

ユウやんは「あーあ」と大仰なため息を一つついて、大粒の栗を口に含みながらセンスに訊いた。

「で、ふえっひよく、ひんほうはなんひやったん？」

「真相はわからずじまいですよ」

ユウやんのもごもごを器用に翻訳しながらセンスは答えた。

「ほい、お待ちどうさん。豚レバーのペーストをカナッペにしてみました。これやったらワインにも合うと思うで。土台はお正月らしくかき餅や」

さっそくセンスは一つ摘んで口に運ぶ。ほろ苦いペーストとかき餅の香ばしさが口の中に広がってご満悦の様子だ。

「五十円玉の話ですけどね。結局アルバイトを辞めるまでわからずじまい。で、同窓会で隣に座った理学棟のホームズに相談を持ちかけてきたというわけです。けど、いくらなんでも情報が少な過ぎる。なにぶん、二十年以上も前の話でもありますしね。私も諦めた次第です。解決できればまた私のお株も上がったのでしようけど……」

「謎といえればその人なんで学生時代に相談せんかったんやろ」

バリキがジョッキの残りを乾しながら言う。

「それは謎でもなんでもありません。あの頃の私は女子学生の憧れの的でしたから。多感な年頃の娘が恥じらって口がきけなかったとしても無理からぬことです」

すまして言うと言とセンスはグラスを乾した。

「ま、寝言は布団に入ってから言うてもらおうとして、確かにおもしろい話やけど、答えも出しようがないわな」

ビールのお代わりを頼みながらバリキが言った。横目でユウやんのきんとんを睨みながら、何かボリユームがあつてさっぱりしたもんを、という無茶な注文をする。しのぶもお任せであり高くないものをと頼んだ。

「そや、田舎から蜜柑がぎょうさん送られてきてん。お裾分けやから適当に食べてや」

主人が蜜柑をてんこ盛りにした箸をバリキの前に置いた。客達は酒とは別腹と見えて嬉々として手を伸ばす。

「ほい、しのぶちゃんもおひとつどうぞ」

絶妙のコントロールでバリキは蜜柑をしのぶに投げて寄越した。が、そこに二つばかり誤算があつたらしい。一つは、アルコールの入ったバリキのアンダーローが想定以上に球速が速かつたこと。もう一つは、しのぶの運動神経が想定以下に鈍かつたことである。

「あつ」

二人の声が図らずもハモった。しのぶの両手はいつそ清々しいくらいのタイミングで空を掴み、

蜜柑は顔面でキャッチ。はずみで銀縁メガネは床に落下してしまった。

「うわっ、普通あれ取れへんかあ？やのうて、ごめんごめん」

しのぶは慌てて床に屈むと顔を床に擦りつけるようにしてメガネを探った。

「メガネ、メガネ、わたしのメガネ」

「ひみつのアツコちゃんに出てくる女の子かいな」

「それはチカコちゃんです。メガネ、メガネ……」

しのぶが律儀に答える。ツツコンだバリキは、しのぶの一人称が微妙に変化したことにまだ気付いていない。

「ああっ」

しのぶが素っ頓狂な声を上げる。

「どないした」

「リボン……。リボン、わたしのリボン」

丸椅子にポニーテールを引っ掛けたらしい。バリキが覗き込むと、ポニーテールがほどけて長い髪がふっさりと無造作に広がっていた。

続いてバサツと音がして「財布、財布、わたしの財布」と騒ぎだす。なんとも賑やかだ。

と、金属がひしゃげる不穏な音がした。

「ああっ」

再び悲鳴を上げるしのぶ。

「フレームを踏んづけてしまいました」

情けない声を出しながら、しのぶはゆっくり立ち上がった。長い髪が顔に掛かってまるで古井戸からすつと立ち現れたお菊さんのようだ。手には九枚の皿ではなく見事にフレームのひん曲がつたメガネを摘んでいる。

「うわっ、すまん。元はと言えば俺が投げた蜜柑のせいやし、ちゃんと弁償したるからな……え？え？ええっ？」

バリキの詫びの言葉が絶句に変わった。

しのぶはメガネをカウンターに置くと顔に掛かった髪を煩わし気に左右に振り分けた。メガネを外した瞳は思いの外につぶらで酔いも手伝ってか奥二重に変化している。なかなか焦点が定まらないのか不安げな眼差しで瞬きを繰り返して、心なしかその長い睫毛には涙が溜まつているように見えた。不安を打ち払うようにしゃんと伸ばした背丈は一段高くなったように見え、思いの外長い髪は振り分けられて緩やかなウェーブを描きながら胸元に掛かっていた。

男達が絶句したのも無理からぬ話だ。そこに立っていたのは紛れもない二十歳の娘だった。

「ま、座ってや」

客商売の貫祿で主人の反応が一番速かったが口をついた言葉は来店したばかりの客に向けられたもののように間が抜けていた。

「はい」

答えたしのぶはカウンターのメガネを見下ろすと眉尻を下げ、今にも泣き出しそうな情けない顔になった。

「どれ、見せてごらんなさい」

センセがひよいと立ち上がると、カウンターを回り込んでしのぶのメガネを摘み上げた。

「ああ、これくらいならすぐに直せますよ」

センセは飄々^{ひょうひょう}と自分の席に戻っていく。

「安心し、ああ見えてセンセ、手先はめっちゃ器用やから」

ユウヤんが太鼓判を押す。

「研究室の予算はどこも厳しいものでしてね。実験器具も大概は自分達で工作するんですよ」

言いながらセンセは鞆の中から工具を取り出した。

「ほい、お待ちど。メガネなしで不自由やろうけど、料理は食べられるやろ」

小鉢に厚手の衣に包まれた唐揚げが盛られて出てきた。別取りの小皿にはポン酢が張っている。

「明石の昼網でほうぼうが安かってん。衣にんにくを利かしてあるからポン酢で食べてみて」

「あ、戴きます。おいしそうな匂いがしますね」

しのぶの声はやや低めの柔らかなメゾソプラノに変化している。

「どうでもええけど、標準語になってるで」

バリキが不思議そうに言う。

「あら、どうしたんだろ？あの……、ええと……、関西弁が出てこなくなっちゃいました。あ、お財布」

思い出したようにしのぶはもう一度屈んで、革の財布と桜色のリボンを拾い上げた。立ち上がったしのぶは、何かを思案するようにその使い込まれて年季の入った赤い革の財布をじつと見詰めている。

「あつ」

しのぶは息を呑むような声を立てた。そのまましばらく焦点の合わない目で遠くを見つめるように目を細めていたが、出し抜けに顔を俯け、肩を震わせると『くふふふ』と妙な声を立てて笑い出した。

「な、なんや？げつ、悪酔いしよったか。しのぶちゃん大丈夫か」

それには答えずしのぶは顔を上げた。

「あの……、五十円玉のお話ですけど本当にその謎って解けないんでしょいか？」

「なんやて」

ユウやんの声が裏返る。

「しのぶちゃんにはこの事件の謎がわかるいうんかいな」

「ユウやんいつから事件になったんです？」

丸眼鏡をずり上げて、しのぶのメガネの修理に掛かろうとしていたセンチが顔を上げた。

「ま、それは置いときや」

主人がセンチを制して興味深そうにしのぶを見た。どうもさっきの『鶴は千円』とは明らかに様子が違っている。

「いえ、あの何もかも全部という訳ではないんです。ずいぶん昔の話ですし、おじさんの動機は想像するしかなくて。でも、おじさんが何をしていたのかは、もしかしたらこうかなって……」

「それがわかったというのですね」

しのぶはセンチに向かってこくりと頷いた。

「おもしろいやんか。しのぶちゃんの推理を聴かせてもらおうや」

「私も是非伺いたい」

四人の男達の視線を浴びて、しのぶはぎゅつと体を縮めた。それをほぐすためのようにビールを一口。

「あのその前にいくつか知りたいことがあるんですけど」

「何なりと」

「わたし、池袋という街に行ったことがないんですけど、その本屋さんの近くに公共の図書館とか、無料で使えてゆっくり座れるような場所はあるでしょうか」

「教授会で上京した際に何度か行きましたが、なかったように思います」

しのぶはこくと頷くと続けた。

「正確にはその出来事があったのは何年のことですか」

「私が二十三の年でしたから、1980年ですね」

「あとふたつ。五十円玉の枚数が他の両替の単位、たとえば二枚で百円とか、十枚で五百円とかだったことはないでしょうか。それと、一枚多くて二十一枚だったり、一枚足りなくて十九枚だったりしたことは？」

ちよつと待って。と断ってセンセはポケットから携帯電話を取り出した。アドレス帳を操作して耳に当てる。呼び出し中……

「もしもし、——さん。いやいや小山さんになったのでしたね。えっ、こやまじゃなくておやま？あ、失礼しました。ええ、吉岡です。先日はどうも楽しいお話を聴かせて頂いて。いやいやこちらこそ。ところでね、ほら例の五十円玉事件のことで教えて頂きたいのです」

センセはしのぶの質問を伝えた。二、三分の短いやり取りを終えて電話を切るとしのぶに向き直る。

「五十円玉はいつも二十枚だったそうです。二枚や十枚だったことは一度もなかったし、過不足にしても一度も多すぎたり少なかったりということはなかったそうですよ。ついでに図書館の件も聞いてみましたがやはりないとのことですよ」

それを聴いてしのぶはこつくりと頷いた。

「ちよつ、ちよつと待った」

口を開きかけたしのぶをユウヤんが止めた。

「ええ酒のアテができた。おいバリキ、お前も一枚噛め。しのぶちゃんの推理が当たるかどうか賭けよやないか」

「あのなあ、どうやって判定するねん。二十七年も前の事件やぞ」

バリキまで事件扱いし始める。二人がやりとりしている間にしのぶは唐揚げをポン酢に浸けて口に運んだ。

「わたし、ほうぼうって初めてなんですけど、すごく淡泊で上品なお味なんですわね」

「ま、見た目が不細工な魚ほど旨かったりするからな。唐揚げやったらフグの上行ってる俺は思うで」

しのぶは、ほうつとため息をついて主人の言葉に頷いた。

「そや、大将に判定してもらお。どうせ事の真相は分らへんのや。説得力があるかどうかで決めてもらおやないか。ええとほな、わし正解する方にビール一杯」

「また、せこい賭けやなあ。それに俺かてしのぶちゃんの正解する方に賭けるから勝負にならんやん。そやなあ……、不正解やったらオッズ2倍、ビール2杯でどうや」

バリキの申し入れも、どっこいでセコい気がする。

「うーん」

たっぷり十秒は間を取ってから、

「うっしや乗った。不正解に一票」

穴狙いの食指が動いたのか、ユウやんはしのぶに向かって片手拝みしながら宗旨変えした。

「ほいおまち。ポリウムがあつてさっぱりしたもんちゆうことで、洋風お節の定番ローストビーフの冷製や。自家製やで」

主人がスライスしたローストビーフに黒いソースをかけてバリキの前に置く。皿の端に添えられているのはお約束のホースラディッシュのようだ。

「ふっふっふ、かかったな。勝負師言うもんはオツズに惑わされたらあかんのちやうか。これと思うた馬にとことん……」

さっそくローストビーフを口に持っていきながらバリキが鼻で笑う。

「あのな、しのぶちゃんは馬か。しのぶちゃん、バリキはほつといて早よ始めてえな」

頷くしのぶの前に新しいジョッキが置かれた。

「え、あのわたし」

「それは私の奢りです。お誕生祝いということもあるが、どんな話が聞けるかワクワクしてきました」

センセは穏やかに笑った。

「あの、ほんとにそんな大げさなお話じゃないんです。もしかしたら、こういうことかなって思っただけで。どうしよう……。見当外れだったらごめんなさい」

「ええて、ええて。で、どんな犯罪が行われててん？殺人か、窃盗団か」

「いえ、別に犯罪とは関係ないと思います」

三杯目になるビールを一口含んでから、しのぶは覚悟を決めたように話しました。

「さつきバリキさんがこの話のポイントをこうおっしゃいましたよね。どうして土曜日のおじさんはそんな沢山の五十円玉を持っていたのか。どうして、本屋さんで千円札に両替えるのか。って」

「ああ、言うたな」

「問題を解き難くしているのは、謎が出揃っていないからじゃないかなとわたし思うんです。このお話には他にもはてなで感じることはありませんよね」

「具体的にはどう言うことでしょう」

「一つは、五十円玉はなぜいつも二十枚だったのか。五十円玉の一番小さな両替の単位はいくらでしょう」

「二枚やな。百円玉と両替できる」

「じゃあ、お札だったら」

「二十枚で千円やろ」

「いいえ、今でしたら確かにそうですけど1980年ですよ。五百円玉が発行されたのは1982年、本格的に流通したのは1983年です。あの頃は岩倉具視の五百円札が使われていましたから十枚で五百円札と両替できます」

男達はまじまじとしのぶを見詰めた。

「えっ、間違っていました？」

「そやのうて、何でそないなことがすらすら出てくるねん」

「だって、常識なんじゃあ……」

言葉尻が消え入りそうになつていく。

「まあまあ、続けてください」

「はい。わたし達は十進法で、つまり十を一括りにして生活していますよね。一概にそうとは言えないかもしれませんが、その五十円玉も十枚の方が分かり易い気がするなあつて。でも、実際にはいつも二十枚だった。ということは、おじさんの手持ちが二十枚と決まっているのか、千円札を手に入れることに意味があるのかなと思っただんです」

さらに、ビールを一口。

「もう一つはてな？と思っただのは、おじさんはどこで金の枚数を数えたんだろうということ。二十枚の五十円玉って、結構かさばりますよね。だから、道端に立って片手に広げて、もう片手で数えるのって難しいんじゃないかなと思っただんです。でも、その辺りには図書館のように無料でゆつくり座って五十円玉を数えられる場所はなかったみたいですし、わざわざ喫茶店に入ってというのも五十円玉を両替に行くおじさんの行動とちぐはぐな気がします。一枚でも足りなかったら両替できないわけですから不安にならなかつたのかなって思いました」

「家で数えて来たんとちやうか」

「そうかも知れませんが。でも本屋さんの前まで来たら不安になるのが人情だと思いませんか。けど、お店のそばでは数えられていないはずなのにおじさんはさも当然といわんばかりの仕種で五十円玉を差し出していますよね。どうして枚数に間違いがないって自信を持っていたのかしらというのが二つ目のはてなです。だから謎は四つあるんです」

しのぶはきちんと箸を置くと居住まいを正した。両手を顔の前で組んで焦点の合わない眼差しで宙を見つめ、何となく笑ましげに口の端をあげると一呼吸置いて話し始めた。

「おじさんの動機はわたしにはわかりません。ですから今から話すお話は半分はわたしの空想です。……どうせならロマンチックなお話にさせて下さい」

何を想っているのかしのぶは少しうっとりした口調になる。

「ここに一人の男の人がいます。年は四十半ば。1980年に四十半ばということは戦前の生まれです。性格は生真面目で几帳面。悪く言うと少し神経質なところがあります。独身か、男やもめで独り暮らしです」

「なんでそないなことが……」

「まあまあ、ですからしのぶさんの空想なんですよ」

「ああそうか」

「身なりから想像するのはとても失礼ですけれど、生活は食べるに困るほどでないにしても、あまり豊かではなかったのではと窺えます。ある日、彼は友達に連れられて池袋にあるお洒

落なレストランに行きます。そこでお店のウェイトレスさんに恋してしまうのです」

ぶっ、とバリキがビールを吹いた。

「せやから、しのぶちゃんの空想やて」

ユウやんがバリキの肩をどやしながら言った。しのぶはやや焦点の合っていない遠い眼差しで続ける。

「彼は、また彼女に会いたいと考えます。でも、そのお店は一品料理でも千円からのお店。普段の生活を考えると厳しかったんじゃないでしょうか。あるいは、戦前生まれの人にとって一食に千円ものお金をかけるということ自体非常に感じられたのかもしれない。でも彼女には会いたい……。そこで彼は生活を切り詰めてお金を貯めることを思い付きます。お金が貯まったらまたあの店に行こうというわけです。生活費の中で日々必ず出費があつて切り詰め易いのは食事ですよね。小さい頃から躰られた習慣で彼は一日三食をきちんと食べる人でした。けれど、男子厨房に入るべからずの世代ですから自炊は論外、作つてくれる奥さんもない。当然毎日三食とも外食になります。その時に受け取るお釣りからいくらか除けておくというのが彼の儉約法だったんです」

三人の男は黙ってしのぶの話を聴きながら時折、肴と酒を口に運ぶ。

「百円ではきつ過ぎる、十円ではいつのことになるか分らない。それで五十円にしたんでしょか。あるいはごく日本的に真ん中を取って五十円という単純な発想だったのかもしれない。ともかくおじさんは儉約を実行に移しました」

「例えば、朝ご飯に一番安いモーニングセット。トーストとコーヒーだけで百五十円。二百円払えば五十円のお釣りで、これを除けておきます。お昼、ラーメン一杯二百三十円。三百円払えばお釣りは七十円。五百円なら二百七十円。ここからまた、五十円を除けます。夜、餃子定食三百五十円。四百円なら五十円のお釣り、五百円なら百五十円のお釣り」

しのぶは歌うように続けた。

「そんな風にして、日曜日の朝から始めて五十円ずつ貯めたとしたら土曜の夕方には五十円玉はいくつになっているでしょう」

三人の男達が暗算を始めるより早く、主人があんぐりと口を開けた。

「二十枚や」

しのぶがにっこりと笑って頷いた。

「だから二枚でも十枚でもなく五十円玉はいつも二十枚だったんです。そしておじさんは枚数を数える必要はなかった」

「毎食確実に五十円玉を除けていったら、数えるまでもなく、そこに五十円玉が二十枚貯まっというわけか」

ユウやんがぼそつと言って湯割を煽った。

「最初に気付いたのは数の問題なんです」

しのぶはジョッキを持ち上げて少しビールを飲んだ。

「きっかり一週間の周期。必ず二十枚の五十円玉。もしかして、これは単純な算数の問題なんじゃないかなと考えたんです。一週間は七日です。七日で二十枚、あと一枚多ければ丁度割り切れるのについて考えていて、『あつ、そうか土曜の夜は両替した千円札を使うと考えて一足せば良いんだ』と思いつきました。そうするときちゃんと割り切れて毎日三回、五十円玉が一枚ずつ増えていくことになりました。一日に三回と言ってすぐに思い浮かぶのは食事ですよ。だから、ご飯を食べる度に五十円玉が増えていったと考えるとすつきりするなあつて……」

「成る程、それで飲食店のお釣りの中から五十円を除けておいたのではないかとなるわけですね」

「ええ、人と人がお金のやり取りをするということがポイントなんです。自動販売機を使ったりすると十円玉が五枚のお釣りが返って来る事がありますよね」

「あるある、わしあれ腹立つねん」

「でも、お店でお釣りを受け取るときは余程のことがない限り硬貨の枚数が多くならないようにお店の人が気を配ってくれます」

「でも、それやったらそのおつちゃん、両替しに来る必要なかったんちゃうか。五十円玉二十枚でも千円やねんから食事はでき……、ああそらそうか。好きな娘の前で小銭じゃらじやら言わせるんは格好悪いわな」

バリキの言葉にしのぶはこくと頷いた。

「五十円玉二十枚でも千円のお料理は食べられます。でも、おじさんはそうしたくなくかったか、できなかった。どうしてかなと考えていて、もしかしたらそうするのが恥ずかしかったのかもしれないと思ったんです。だから、おじさんが両替した千円札を使いに行く場所にはそう言った気兼ねをする人がいるんじゃないかなと思って……」

しのぶはふうと息を吐き出して話を終えた。店の中はしんと余韻のような沈黙が訪れた。炭火の上で回っているドラフトの換気扇の音がやけに耳に響く。

ユウヤんがグラスを置く音が響いた。

「大将、バリキに生一杯注いだってくれ。わしの奢りや」

「あ、あのでも、これ全部わたしの想像ですから……」

しのぶがふためいて、半分腰を浮かせる。

「いや、大将に判定してもらうまでもない。わしは納得いった。そら、今となってはそれが正解かどうかは確かめようはないけど、筋は通ってるわ」

「ええ、とてもユニークな発想です」

センセも頷いた。

言われたしのぶは自分が恋する娘のように真っ赤になる。

「ん？そういうえば、さつき謎が解けたときになんやくつくつ笑るとったな」

ふと思いつ出したようにバリキが言った。

「確かに今の話は筋が通ってたと俺も思うで。けど、これのどこがおもしろいねん」

男達の視線が又しのぶに集まる。しのぶの頬がますます赤くなる。

「あの……。ホントにつまらないことなんです。ただ、そのおじさんの仕種が何となく可愛いな
と思つて」

「つていうと」

代表して主人が合いの手を入れる。

「こんな想像をしたんです。四つか五つくらいの男の子が母の日にお母さんにカーネーション
をプレゼントしようと思ひ立ちます。お爺ちゃんを叩いて十円。庭のお掃除を手伝つて
十円。お使いに行つて十円……。そんな風に毎日、毎日、もらったお駄賃を小さな貯金箱
に貯めていきます。母の日の朝。貯金箱の底の蓋を外して、お金を畳の上に広げて。それを
小さな両手一杯にぎゅつと握つた坊やは靴をつっかけかけて商店街の花屋さんを走つていきま
す。いらっしやいつて、声を掛けてくれた花屋のお姉さんの目の前、カウンターの上にぎざあ
つて全財産を広げて坊やはこう言うんです。『カーネーションください』——なんだか、その姿
と土曜日のおじさんがダブつて……」

しのぶは紅潮した頬に手を当てた。

「もちろん、坊やのお目当てはカーネーションを買うことなんですけど、その前に誰かに自慢
したくて仕方がない気持ち仕種に現れていませんか。『みてみて、ぼくこんなにいっぱい貯
めたんだよ』つて。気が急いでいたから仏頂面をしていたのでしようけれど、本心はもしかした
ら土曜日のおじさんも同じだったのかなつて……。そう考えながら本屋さんのカウンターで

五十円玉を広げている姿を想像したらなんだか可愛くって」

しのぶは一頻りまたくつくつ笑って何か言いかけたが、思い直したように口を噤むとビールを煽って一息に飲み干した。男達は二十歳になったばかりの少し風変わりな娘の呑みっぷりを呆気にとられて見ていた。

「あの、今度こそ。自分のお勘定でビールを一杯お願いします」

しのぶはジョッキを差し出した。

「せやからな、人にわからんようにジョーカー以外のカードに疵を入れるねん」

ユウヤンが得々といかさまランプの高説を垂れる。

「最初はその娘、電車の中でお祈りでもしてるんかなと思ってる。そしたら……」

そのまま座席から転げ落ちた爆睡女子高生の話をバリキが面白おかしく話す。

「居酒屋で呑んでいる私が言えた義理ではないのですけど、日本人の戦後最大の喪失は夕御飯じゃないでしょうか。いつのまにか一家団欒という家族の基盤を我々は失くしてしまっている気がするんですよ」

センセがしたり顔で嘆く。とりとめのない話題で酔鏡の夜は過ぎていく。仕事の愚痴や気の滅入るニュースを口にするものは誰もいない。気持ちの良い酔いがカウンターで肘を突く酔客達を包んでいた。一頻り注文が途切れたので、主人は先程から黙って何やら下拵えを始めていた。

「はい、直りましたよ」

センセがしのぶのメガネを手の平に載せてバランスを見ながら仕上がりを確認した。
「ありがとうございます」

危なっかしい足どりでカウンターを回ろうとするしのぶを制して、センセはカウンターを回り込んでメガネを渡した。早速、しのぶはメガネを掛けてみる。

「……めっちゃ助かりました。これないと、あたし道も歩かれへんです」
ちやつかり関西弁に戻って、しのぶは礼を言った。

「うわっ、もうこんな時間。すみません、いろいろご馳走になって。お先で申し訳ないんですけど、そろそろあたし帰ります」

しのぶはコートに手を伸ばした。

「お、そうか。氣をつけてな」

バリキが氣安く手を振る。

「五十円玉の話おもしろかったで」

ユウヤんも残り少ないきんとんの鉢から顔を上げて手を振った。

「折角ですから彙員にしてやって下さい。良い店ですよ」

センセが主人に代わって店の宣伝をする。誰もしつこくは引き止めないあたり如何にも呑み慣らした男達らしい氣持ち良さがあつた。

「ちよつとだけ待ち」

主人が仕込みの手を止めて顔を上げた。

「名古屋の知り合いから珍しいもん送ってもらてん。お裾分けやから食べていき」
言うとな主人は小皿をそれぞれの客の前に出した。

「なんや？ういろ羊羹か」

ユウやんが首を傾げながら皿の上の物体を箸でつつく。厚さ数ミリ、三センチ四方くらいの黒くて四角いものが三切ればかり乗っていた。艶といい、箸でつつくとふるふると揺れる感触といい、確かに羊羹か寒天のような食べ物に見える。よく見ると底の方に白いものが閉じ込められるように収まっていた。

「うめごや」

「うめご？」

バリキが鸚鵡返しする。

「鮫の皮の煮凝り。名古屋の猟師町で作られる名産品やな。ちよつとクセがあるけど酒によう合うで」

しのぶは箸でつつくとふるふる震えるゼリーのような煮凝りを暫く不思議そうに見ていたが意を決したように箸を入れ小さく切って口に含んだ。微かにアンモニアの臭みを孕はらんだ醬油辛い味が広がる。

「変わってるやろ」

主人がにっと笑う。

「ところでしのぶちゃん。あんたさつき五十円玉の話のしまいに何か言いかけへんかったか？」
しのぶは「あ」と言って、ばつの悪い顔をした。

「あの、……」

「呑み屋では言いたいことは全部言うてから帰るもんや。言いさしで帰られたらこつちも気になって寝られへんやん」

ぐい呑みに爛酒を注いで主人は顎をしゃくつた。

「俺からの誕生祝いや」

「あの、でも、ほんとにしようもない空想ですから……」

「そのつまらんことを平気で言えるんが呑み屋のええところやんか」

ユウやんが横合いから催促するように言うとかウンターを回り込んでメガネをまた外してしまふ。しのぶは「きゃっ」と小さな悲鳴を上げた。

「さつきの推理に続きがあるんですね。それなら私もぜひ聞きたい」

センセが同調する。

「ま、冷めんうちにどうぞ」

主人に促されてしのぶは湯気を立てているぐい呑みを持ち上げた。一口含むと驚いたように目が大きくなる。

「つ、熱い。けどおいしい」

慌てて一口目を喉に流して言いながら、ほうつとため息をついて目を細める。目尻が朱に染まった。

「甘いのに、凜としていて。不思議な味がするんですね」

「灘五郷の銘酒や。去年の甑こし倒しやけど、爛で呑みごろやなと思うててん」

主人がしたり顔で笑う。爛酒の火照りに背中を押されたのか、しのぶは徐おもむろに口を開いた。

「あの、空想ついでもう少しお話しても良いですか」

「どうぞどうぞ」

バリキが焼酎の湯割のお替りを頼みながら頷く。必要以上にオーバーアクションなその仕種がそのまま酔いの度合いを代弁していてユーモラスだ。

「土曜日のおじさんが恋をしたウエイトレスさんは、そのレストランのオーナーのお嬢さんで年の頃は十七、八。受験を控えた高校生じゃないかなって……」

バリキが今度は呑み掛けた焼酎をぶつと吹いた。これは酔いのせいとは言えまい。

「やっぱり変ですか」

「り、理由を聴かせてや」

「おじさんがとても急いでいたからです。どうして急いでいたんでしょう？」

「そら、その娘に早く逢いたいからやろ」

と、ユウやん。

「でも、お店は逃げませんよ。むしろ、これから好きな娘に会うのならうきうきした顔をしていたっておかしくないのに、おじさんは変にいらいらしていた。そして千円札を差し出すと引っ手繰るようにして受け取って自動ドアに肩をぶつけながら飛び出して行ったんですよね」

「ええ」

「時間は土曜の夕方、飲食店はこれから稼ぎ時です。どう間違っても急いで行かないとお店が閉まってしまふような時間じゃありません。でも、おじさんは急いでいた。それは、お店は閉まらないけどその娘さんが仕事を終えてしまふからじゃないのかしらと思ったんです。何度かそのお店に通ううちに、少し遅い時間に行くと彼女がお店を上がってしまったことがあって、おじさんは焦っていたんじゃないかなって」

「なるほど」

「でも、それもおかしな話ですよ。夕方までの日中はお客さんも少なくて割とお店は暇なはずですよ。そんな暇な時間帯だけ働いてこれから忙しくなるときにお店を上げるウェイトレスなんて普通いません。いるとすれば、そのお店の身内の人です」

「で、オーナーのお嬢さんというわけですか。でも、高校生というのは」

「土曜の夜ですよ。まさかお嬢さんが夜遊びに行くのに、ご両親が公認で家の手伝いを放免するということも考えにくいし、何か店の手伝いより優先される用事——たとえば受験のために塾や予備校に通うと言った用事だったんじゃないかなって思ったんです」

一頻りしんとした間があった。

「スタンディングオベーション」

センセがやおら立ち上がったって手を打った。

「けど、女子高生が塾に通ってたというケースとは限らへんのちゃうか？三十近いお姉さんがピアノの稽古に行ってたとか」

バリキが疑問を挟む。

「そんな……、だって女子高生の方がロマンチックじゃないですか」

しのぶが口を尖らせて抗議する。

「ええと……。なんやロマンチックの基準がようわからへんけどええ話やないか。そのおっさんの涙ぐましい努力に乾杯や」

ユウやんはグラスを軽く上げて煽った。

「夢見る頃を過ぎてても、か……。事の真相は今となつては確かめようもないけど、幾つになつても男はそういうロマンチストな一面を持つてるのとちゃうかな」

いくぶんしんみりと言つてユウやんはうめごを一切れ口に含んだ。ほろりと広がる苦味を焼酎ですすぐ。その言葉にしのぶは頷きながらうつとりとした眼差しになると何か言いたげにじつとセンセを見やった。

「ごちそうさまでした」

席を立つと几帳面なお辞儀をしてしのぶは格子戸を開けた。いつの間に降り出したのか

舞い始めた粉雪が彼女のコートをかからげてひんやりとした一月の夜気を店の中に運ぶ。

「おう、また来いや」

4人の男達は思い思いに手を振って彼女を見送った。戸の向こうで彼女はもう一度お辞儀をすると静かに戸を引いた。男達はしばらくの間黙ってその黒々とした格子戸を見詰めていた。

足元には夜気の名残が残っている。にも関わらず、酔客達の気分がほんのりと温かいのは酒のお陰ばかりではあるまい。呑み屋に通っていると時としてこういった幸福な気分を味わうことができる。

「余所さんの家のことやから滅多なことは言えへんねんけどな」

ユウヤんが珍しく歯切れの悪い口調で切り出した。

「標準語のしのぶちゃんかホンマに言いたかったことはまた別にあつたんちゃうかと思っへん。あの娘なりにセンセに氣遣うて遠慮したんちゃうかなあて。せやから、余計なお節介やと分かっててわしが言うで」

ユウヤんは思い切るように焼酎の残りを乾した。

「とうに夢見る頃を過ぎてても、夢見ることを忘れへんかったおっちゃんもおったわけや。夢見る頃に夢を見ることを応援したつてもええんちゃうかな」

言われたセンセはじっと黙っている。

「俺も若造の戯言やて言われそうやけど、やっぱりじっくり話してみるべきやと思っへんわ。巧

く言えへんけど、年取った時にな、悔いのない最高の人生を送った言うてる人かて、別の選択をした人生がどんなんやったかは知らへんねん。俺はいろんなことに挑戦して、結果、失敗や後悔だらけの人生になってしもても構へんと思うてる。その方がおもしろいもん。ええ夢見さしてもろたと割り切るわ。せやから、俺はなんぼ声かけられてもどこかのチームの専属にはならへんねん。野球やったら野球、バスケやったらバスケだけ、他はやったことがない言うのはやっぱりつたらん」

店の中は静かだった。備長炭の熾おきが乾いた音を立てて爆ぜた。

「わかっていきます。わかってるんですよ」

センセは柔らかく笑って目の前のぐい飲みに話しかけるように呟いた。

「すまん」

異口同音にユウヤんとバリキが詫びる。

「いえ、ありがとうございます。やはりこの店は良い」

顔を上げたセンセの表情は気持ち吹っ切れた清々しさがあつた。

「しかし、ええ呑みっぷりの娘やったな。あら、立派な酒飲みになりよるで」

ユウヤんが妙な感想を述べる。

「けど、なんや不思議な娘やったな」

バリキがぼつりと言う。

「ええ、あの豊かな想像力と洞察は並じゃありません。正直、うちの研究室にほしい人材で

す」

センセの応えにバリキは首を傾げる。

「いや、それもそうやねんけど。なんて言うたらええんかな、反応速度がはや過ぎる言うか。センセが五十円玉の話をしてから、しのぶちゃんがあの答えを思いつくまで、何分もかからなかったと思わへんか」

「せやから、それがしのぶちゃんの凄いとこやねんか。大将、もう一杯だけ」
空になったコップをユウやんが振った。

「……、大将」

主人は何やらぼうつとしていた。

「お、あいよ」

主人の手のひらの中にはしのぶが財布から取り出した千円札がある。財布の中に一枚きりだと言っていたその紙幣を主人はまじまじと見詰めていた。

『二十歳になったのでお酒を飲んでみたいと思って……』

刹那、あの娘の言葉が蘇り、しのぶがこの店にやってきた経緯を詮索する誘惑に駆られる。が、その誘惑を振り払うように軽く首を振ると黙って手提げ金庫にその紙幣を仕舞った。

「ほい、お待ち」

魔法のような手捌きでユウやんの前に新しい焼酎のグラスを置く。空になったグラスを受

け取ると主人は何事もなかった顔つきでそのグラスをシンクに浸けて洗い始めた。

（第一夜了）